



先月号からの続きで、ジョン・ホワイトフォード神父の「聖書のみ」という文章の一節です。彼はプロテスタント教会の大学神学部にて在学中に正教について学び、20代半ばに正教会で洗礼を受けられたということです。

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

## 会 報

2024.4.1. No.407

札幌ハリストス正教会 発行



札幌ハリストス正教会

発行責任者 管轄司祭 エフREM後藤悠太

〒062-0042 札幌市豊平区福住2条2丁目3番1号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com/sapporo/>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

### b) 新約聖書の目的とは何か

自分が読んでいる聖書の特定の節が、どのような文学ジャンル literary type に属しているかを考慮しなさい。プロテスタントの聖書研究ではこう教えられます(このことについては、私も同意見です)。なぜなら

異なる聖書のジャンルは、それぞれ異なる使われ方をしてきたからです。

さらに考えなければいけないことは、自分の読んでいる聖書の書物、あるいは節にはどのようなテーマと目的があるか、ということです。新約聖書の文学ジャンルには、大きな四つのカテゴリーがあります。それは、福音書、歴史叙述 historical narrative(使徒行伝)、書簡(手紙)、最後に黙示録という終末論的、預言的な書です。福音書は、ハリストス

の生涯、死、復活を証しするために書かれました。聖書の歴史叙述(使徒行伝)には、神の民の歴史や、その歴史において特徴的な人物がどのように生きたかが描かれています。また神の民の歴史や人物において、神の摂理がどのように働いたのかが示されます。書簡が書かれた主

な目的は、様々な教会で持ち上がった問題に答えることです。そのため、人々にとっては当たり前のこと、

皆が理解していること、誰も問題だと思っていないことについては、詳細に触れられることはまずありません。教理的な問題を扱うにしても、そのほとんどが論争を呼んでいるもの、人々が誤解している問題についてです。礼拝に関することについては、礼拝に関して何か問題が起きた時に限り取り上げられる程度です(例えばコリント前書 11 章から 14 章)。

## 「聖書のみ」という教えは 本当に正しいのか (2)

預言的な書(黙示録)が書かれた理由は、歴史において神が最終的に勝利される、ということを明らかにするためです。

まず注意すべきは、新約聖書に収められているどの文学ジャンルについても、礼拝を主なテーマとしては扱っているものはない、ということです。教会の礼拝の仕方について詳しく述べる、という意図で書かれたものもありません。旧約聖書においては、イスラエルの民の礼拝について詳しく(といっても、余すところなく全て、ということではありません)扱ったものがあります(例えばレビ記や聖詠です)。新約聖書においては、初代のクリスチャンの礼拝についてほのめかしている箇所がわずかにあるに過ぎません。なぜでしょうか。初代のクリスチャンの礼拝には全く秩序がなかった、ということではありません。奉神礼歴史学者は、使徒たちはユダヤの礼拝様式を受け継ぎ、初代のクリスチャンたちはそのユダヤの礼拝様式を堅固な土台として、自らの礼拝を続けていた、ということを明らかにしています。ただ初代のクリスチャンの礼拝について言及した箇所がわずかしかなからといって、彼らが「カリスマ派」のように自由奔放に礼拝していた訳ではありません。旧約の先祖が礼拝していたように礼拝していました。新約のクリスチャンたちは祈りの時間を守り(使徒行伝 3:1)、神

会堂(シナゴグ)



殿で礼拝し(使徒行伝 2:46、3:1、21:26)、会堂(シナゴグ)でも礼拝していました(使徒行伝 18:4)。

また、どの新約の文学ジャンルにおいても、総合的な教理の教育を目的としたものは一つもない、ということにも注意する必要があります。カテキズムや組織神学といったものは見受けられません。クリスチャンとして自分たちには聖書だけで十分であるとするなら、なぜ聖書には包括的に教理を述べたものがないのでしょうか。想像してみてください。聖書がどの教理的な問題についても明解に答えてくれていたのであれば、これまでなされてきた数多くの論争は、いかにたやすく解決されていたのでしょうか。そうであれば何と都合なことでしょう。しかし、現実には聖書にそのような論争を解決するものは備わっていません。

ただ、これまで私が行った主張について誤解していただきたくはありません。私の主張には、聖書の重要性を軽んじるという意図は全くありません。断じてありません！正教会では聖書は全て靈感を受けており、誤りのないもの、権威あるものと信じています。しかし、聖書には教会にとって重要なテーマについての教えが含まれていない、ということもまた事実です。今まで述べてきましたように、新約聖書はどのように礼拝すべきか、ということにはわずかにしか教えて



聖体礼儀の小聖入、福音經を持つ輔祭

くれません。そして、これは決して些末な問題などではありません。さらに言いますと、教会は私たちに聖書を伝え、聖書を守ってきました。さらに私たちは教会から礼拝の仕方を受け継いでいます。聖書を守ってきたのも、礼拝を守ってきたのも同じ教会です。もし教会が使徒から受け継ぐ礼拝を守ってきたことに私たちが疑念を抱くならば、教会が聖書を忠実に守ってきたことに対しても疑わざる得ません。

#### c) プロテスタントにおいて、聖書は実際のところ本当に「十分」なのだろうか

プロテスタントの人々はよく、『聖書だけを信じている』と言います。しかしプロテスタントの人の聖書の使い方を見てみると、疑問がたくさん湧いてきます。例えばプロテスタントの人々は必要なのは聖書だけと言っているにもかかわらず、なぜ教理やクリスチャン生活全般について本をたくさん書いているのでしょうか。聖書さえあれば聖書が理解できると言っているにもかかわらず、なぜ人々に聖書だけを提供する、とはならないのでしょうか。聖書「だけで十分」であるとするれば、なぜそこから生まれる結果はいつも同じとはならないのでしょうか。つまり、なぜ誰もが同じように信じるようになった、とはならないのでしょうか。聖書だけで十分であるとするなら、多くのプロテスタントの人々が聖書を「研究する」目的とは何なののでしょうか。なぜ小冊子や資料を信徒に渡したりするのでしょうか。一体なぜ教えたり説教をしたりするのでしょうか。ただ聖書を人々の前で読むだけではだめなののでしょうか。答えは簡単です。プロテス

タントの人々は、聖書だけでは聖書を理解することができない、ということを直感的に理解しているのです。彼らは決して認めないでしょうが……。実際、プロテスタントの各団体にはそれぞれ自分たちの伝統があります。もちろん彼らはそれを伝統であるとは言いません。例えばエホバの証人の信徒は数多くいらっしやっても、その内部では皆同じように信じています。南部バプテスト派の人々もたくさんいらっしやっても、彼らの中ではやはり皆同じように信じています。しかし、エホバの証人の人々と南部バプテスト派の人々では信じていることが違います。これは、決して偶然ではありません。エホバの証人の人々にしても、南部バプテスト派の人々にしても、個人個人で聖書を学び、そしてそれぞれが導かれた結論が偶然にも同じであった、ということではありません。そうではなく、彼らはどのグループに属している場合であっても、そのグループ内でどう信じたらいいのかを学んだのです。つまり、そのグループ内にはそれぞれ共通の伝統があり、そこから学んだのです。ですから実際の論点は、「ただ聖書だけを信じているのか否か」、あるいは「伝統を使用しているかどうか」、ということではありません。実際の問題点とは、「聖書を解釈するにあたり、どの伝統を用いているのか」ということになります。一体どちらの伝統が信頼に値するものでしょうか。正教会の使徒から受け継いだたった一つの伝統でしょうか。それとも、プロテスタントの互いに錯綜した様々な伝統でしょうか。宗教改革の到来以前に遡ってその起源を見出すことはできない、プロテスタントの現代的な伝統でしょうか。

## 北海道ブロック誦経研修会



3月28日(木)、29日(金)の日程で札幌教会にて北海道ブロック誦経研修会が開催されました。函館のクリメント児玉神父様、釧路のステファン内田神父様



がいらっしやり、また札幌教会から4人、小樽教会から1人、函館教会から1人、上磯教会から2人、釧路教会から1人の参加がありました。またオブザーバー参加として札幌教会を中心に6名の方が参加されました。



1日目は、講義と実技『大斎の平日早課に慣れよう』と題して、誦経にあたっての若干のアド

バイス、また正教会の一日の祈りのサイクルとはどのようなものであるのかを学びました。そして、大斎平日早課の実技を通して、早課のテーマや徹夜祷の早課との違い、それぞれの祈りの意味などを学んでいきました。早課のカノンは大変難しいため、慣れるまでが大変ですが、右と左の二人で分担して句とトロパリを読む方法でも練習してみました。終了後、祈りの意味について少し分かったという感想もありましたので、このような学びの機会をもてたことは良かったのではないかと思います。

その後、誦経の担当を決め、クリメント児玉神父様の司祷により晩堂大課、早

課、1時課の祈祷が聖堂で行われました。

2日目は、朝からステファン内田神父様の司祷により、3時課、6時課、9時課、晩課、先備聖体礼儀が行われました。研修会最後の感想では、「ティピカの真福詞の聖歌が泣けるほどよかった!」という声もありました。

祈祷後に昼食をいただき、私、後藤より「食事の節制と先備聖体礼儀」について簡単なお話をしました。なかなか札幌教会では食事の節制の意義についてお話する機会がありませんでした。これを機会に、自分ができると思う程度より少しだけ背伸びして食事の節制をしてみようというのはいかがでしょう。ただもちろん無理は禁物です。食べ物の「空腹」が神に対する「飢え渴き」となりますように。

最後に参加者の方、オブザーバー参加の方から感想をお聞きし、閉会いたしました。今回はじめて誦経研修会に参加したという方も2名ほどおられました。私は研修会の冒頭で「キリスト教は教えるではなく、新しいいのちである(ヴェレヤの大主教聖イラリオン)」という言葉をご紹介いたしました。この2日間の奉神礼は、私たちにとってまさに「新しいいのち」の体験であり、「神の国」の体験でした。しかし、私たちはこの貴重な体験を「難しいもの」、「かたぐるしいもの」、「自分の生活とはほど遠いもの」と片付けてしまいがちです。今回の研修会を通して、少しでもこの体験に近づき、日々の糧と力となりますようお祈りします。



## 聖堂修理へ

長い間懸念されていましたが、永眠されましたニコライ前田俊一郎兄より多額の献金があったことで資金のめどが立ち、執事会にて工事をすることを決定いたしました。またその経過をセラフィム府主教座下、宗務局長のマルコ小池神父様にお話ししたところ、その通り修理を進めてください、という

お言葉をいただきました。

また婦人会からも献金をしていただき、工事費に当てる予定です。皆様の御協力、そして神様の恵みにより聖堂修理の実現が近づいてまいりました。深い感謝を表したいと思います。



## 復活祭の日程



今年の札幌教会の復活祭の日程をお知らせいたします。5月4日(土)の午後10時より痛悔、11時30分から夜半課、5日(日)の深夜0時より十字行、早課、聖体礼儀が行われます。聖体礼儀後にはささやかながら祝賀会も行います。ハリストスのよみがえりの喜びを共にしましょう。地下鉄の始発まで信徒会館で待たれる方もいらっしゃるかと思います。

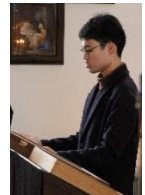
深夜の祈祷では参拝が難しいです、という声も多数お聞きしました。そこで、5日(日)の15時より復活祭主日晚課(愛の晩課)を行い、ここでも主の復活をお祝いいたします。卵の成聖も行いますので、ぜひこちらにもいらっしゃってください。

なお、小樽教会と苫小牧教会の復活祭の予定ですが、苫小牧教会は5月12日(日)、小樽教会はまだ未定です。よろしく願いいたします。

## コンスタンティン兄大阪教会へ

堂役、誦経のお手伝いをしていたいたコンスタンティン植田陽紀兄ですが、お仕事の転勤で広島へ行かれることになりました。これからは大阪教会所

属となりますが、向こうに行かれても神様のもとへとまっすぐに歩むことができますように。幾年も！



## 婦人会だより

復活祭が近づいて来ました。今年の復活祭は5月5日(日)です。例年は2日前に卵染めをしていましたが、今年度はご祈祷があるため5月2日(木)午後1時から4時に行います。卵染めを中心に聖堂のお掃除も出来ればと思っています。多数のお手伝いよろしくお願いします。

紅卵は4月21日までに申し込んでください。申し込みは、復活祭深夜の祈祷、もしくは5日(日)午後3時からの晩課に来られる方に限定させていただきます。電話でも受け付けております。よろしくお願いします。

(パラスケワ中野良恵)